

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	渡邊 駿
論文題目	現代アラブ君主制国家群におけるガバナンスと社会 —ヨルダン・ハーシム王国を事例として—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、中東地域研究における重要な研究課題である現代国家のあり方とガバナンスの実態について、8つあるアラブ君主制国家を1つの重要な「群」と指定して取り上げ、特にヨルダン・ハーシム王国を事例として考察をおこなったものである。</p> <p>第1章では、現代アラビア君主制について、正統性とガバナンスの観点から理論的な考察をおこなっている。現在の政治学において「君主制」は順次消滅するものとして想定されており、研究対象として正面から取り扱われていない。そのことを批判的に考察するとともに、現在でもアラブ諸国の3分の1が君主制国家であり、しかも民主主義国家において儀礼的な役割にとどまっている西欧の君主制とは異なり、いずれも実効性を持っていることから、研究の必要性が高いことを明らかにしている。</p> <p>第2章では、ヨルダンについて、先行研究レビューをおこない、さらにトランスヨルダン首長国期 (1920～1946年) からヨルダン王国となった1946年から1980年までの歴史的展開を検討して、ガバナンスや国家資源の分配という観点から、ヨルダンが君主国家としてどのように形成されてきたかを明らかにしている。</p> <p>第3章では、ヨルダンの体制中枢において、国王によってどのようなエリートが任命されてきたかを、具体的に検証している。特に、首相と王宮府長官に着目し、1921年から現在までを5期に分け、それぞれの時代においてどのようなエリートがこの2つの要職に任命され、どの程度の期間在任したかを、出身地域・学歴等の要素を加味して定量的に調査した上で、その政治的な意義を分析している。王室出身者の登用がきわめて限られていること、いわゆる名望家からの登用はおおむね第3期 (1970～89年) をピークに減少していること、さらに1999年の王位継承 (フサイン国王から現アブドゥッラー2世国王へ) 以降、新自由主義的な改革がおこなわれ、民間部門での職歴を持つエリートが厚遇されているといった傾向が明らかにされている。</p> <p>第4章では、現代ヨルダンのガバナンスにおいて議会が果たしている役割が検討されている。ヨルダン川西岸地区は1948年以降ヨルダンの領土の一部であったが、1988年に西岸地区を法的・行政的に分離し、それにともなう政治危機が1980年代末から顕著になった。そのため、議会の改革、選挙法改正などが展開され、西岸地区を分離したヨルダン人アイデンティティの形成とともに、議会がガバナンスの重要な経路となったことが明確となった。</p> <p>第5章では、1999年に即位したアブドゥッラー2世が改革イニシアティブを主導し、新自由主義的な政策を推進する中で、国王と議会の対立が顕著となった公職年金法改正問</p>			

題を検討し、その政治過程を分析している。そこでは、国王が改革の推進によって正統性を強めようとする、その改革によって既得権益を脅かされるエリート層との間に摩擦が生じる「介入のジレンマ」に陥っていることが明確となった。

結論では、以上のような研究の成果を総括している。まず、アラブ君主制国家群が実効性を持つ君主制による統治という点や、いずれも国家を通じた資源分配による支配と国民による正統性の承認を基礎としている点で共通性を持っていることが明らかとなり、次に本論文の主要な事例とであるヨルダン・ハーシム王国が、産油国とは異なる資源の限定性を有する中で、現代国家として君主制を維持してきた過程をガバナンスの観点から解明したと結論づけられている。